CHRISTIAN CLASSICS
NO. 4

NOTES ON LEVITICUS
BY C. H. M.

レビ記講義

クリスチャン古典シリーズ第四集

C・H・マッキントシ著

山岸　登訳

レビ記講義

NOTES ON LEVITICUS

BY C. H. MACKINTOSH

目次

はじめに……九
第一章……一五
第二章……四三
第三章……九〇
第四章—第五章十三節……一二四
第五章十四節—第六章七節……一六一
第八、第九章……一八二
第十章……二〇六
第十一章……二三四
第十二章……二五四

第十三、第十四章……二六二
第十五章……三二二
第十六章……三三〇
第十七章……三四七
第十八章—第二十章……三五三
第二十一、第二十二章……三六九
第二十三章……三七九
第二十四章……四〇三
第二十五章……四一三
第二十六章……四二四
第二十七章……四二九

はじめに

第一章を詳しく学ぶ前に、私たちが注意深く考えなければならない二つの事柄がある。第一に主なる神が取られた場と、第二にいけにえがささげられた順序である。

「**主**はモーセを呼び寄せ、会見の天幕から彼に告げて仰せられた」（1節）。これが、この書の中に記されている主の交わりのための場であった。主はかつて、シナイ山から語ってこられたことがあった。その主が取られた場が、その交わりに特別な色彩を与えてきた。恐るべき山から恐るべき律法が布告された。だがしかし、この書では、主は「会見の天幕から」語っておられる。これは全く違った場である。私たちは、この天幕が前の書の終わりに建てられたことを知っている。「また、幕屋と祭壇の回りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛けた。こうして、モーセはその仕事を終えた。そのとき、雲は会見の天幕をおおい、**主**の栄光が幕屋に満ちた。……イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は**主**の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである」（出エジプト四〇・33～38）。

さて、幕屋は、神の恵みによる御住まいであった。神は、神が御民と交わることを可能にする土

台を生き生きと表現しているものによって四方から囲まれておられたので、そこにお住みになることができた。もしシナイ山の上で現わされたご性質を全面的に表わしながら、神が彼らの真中に降りて来られたならば、彼らは一瞬のうちに、「うなじのこわい民」として焼き尽くされてしまったことだろう。しかし神は、垂れ幕というキリストの肉体の型（ヘブル一〇・20）であるものの中に退かれた。そしてイスラエルの民のうなじのこわさではなく、贖いの血だけが神の目にうつり、また神のご性質の要求に答えうる贖いの血が置かれている場所である「贖いのふた」の上に、神は座につかれた。大祭司によって聖所に持ち込まれた血は、すべての罪から私たちをきよめるキリストの尊い血の型であった。そのときのイスラエルはその霊的な意味がわからなかったが、その血は、神が彼らの間に臨在なさる正当な理由となった。そしてその血が「聖めの働きをして肉体をきよいものに」（ヘブル九・13）した。

これは神の、この書の中における主な立場である。そしてこの書の中に示されている神と御民との間の交わりを正しく理解するためには、これをまずよく理解しておかなければならない。その中に私たちは、純粋な恵みと一致した不動の聖さを見ることができる。どこから語ろうが、神は聖である。神はシナイ山の上で聖であられた。そして贖いのふたの上でも聖い方であられた。しかし前者にあっては、神の聖さは燃え尽くす火と結びついており、後者にあっては忍耐深い恵みと結びつ

いている。さて全き恵みと全き聖さの結びつきは、キリスト・イエスによる贖いの特徴である。そしてそれがレビ記の中に、種々の方法で予表されている。神は、悔い改めぬ罪人を永遠の刑罰で裁くとき、聖い御方である。だが、罪人を救う神の聖さが現わされたときにこそ、「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」という最大、最高の賛美の声が天にいる御使いの大軍勢から引き出された。この賛美は、恐るべき律法との関係では、決して歌われたことがなかった。疑いもなく、いと高き所には栄光が神にあった。だが、律法とは神のみこころにかなうために人が何をしなければならないかについての宣言である以上、地の上に平和があるはずがなかった。しかし、御子が人として地の上に来られたとき、神は、御子がその人格とみわざとをもって神の栄光と人の祝福とを最も完全に結びつける方であるとして、御子を喜ばれたのであり、その神の全き喜びがあのように表現されたのであった。

さて、レビ記の始めの数章の中に書かれている、ささげ物がささげられる順序についても語らなくてはならない。主は全焼のいけにえから始められ、罪過のためのいけにえで終えておられる。言い替えれば、主は私たちが始めるところで終えておられる。この順序は特別であり、非常に教訓的である。まず最初、罪を責める矢が魂に突き刺さると、自分が犯した罪を深くさぐり出そうとする良心の働きがある。記憶の目は過ぎ去った昔の生活のページを鋭く読み返し、神と人に対して犯さ

れた無数の罪の汚れを見つけ出す。魂の歴史のこの時期においては、それらの罪過の源である心の中の罪の根の存在はあまり問題にはなっていない。かえって、あの罪、この罪を実際に犯したという厳しい明白な事実が問題となる。それだから、この良心は、神がすべての罪をことごとく赦すためにいけにえを備えておられることを知る必要がある。このことは罪過の供え物の中に教えられている。しかし人が信仰の道に進んでくると、今までに犯してきた罪は根から生じた枝に過ぎず、泉からの流れであり、しかも、人間の性質の中にある罪そのものがその源であり、その根であることに気づく。このことは、その人の良心をいっそう深い苦しみへと導く。そしてそれは十字架のみわざの意味のいっそう深い把握によってのみ、解決されうる。一口に言えば、十字架は、神ご自身が「肉において罪を処罰された」（ローマ八・3）場所として理解されなければならない。読者は、聖書が「肉において罪（複数）を」とは語っておらず、「肉において」罪過の源である罪の根、すなわち「罪（単数）を」と語っていることに気づかれていることであろう。このことは非常に重要な真理である。キリストは聖書に従って、私たちの罪過のために死んでくださったばかりでなく、キリストは「私たちの代わりに罪とされた」（Ⅱコリント五・21）。これが罪のためのいけにえの教義である。

私たちの心と良心がキリストのみわざの意味をよく理解して、平安と安息とを得たとき初めて、

私たちは、神の御前での平和と喜びの基礎であるキリストご自身を糧とすることができる。私たちは、私たちのすべての罪過が赦され、すべての罪が裁かれてしまったということがわかるまで、平安や喜びというものを持つことができない。私たちは、まず罪過のためのいけにえと罪のためのいけにえの意味とをはっきりと理解してから初めて、和解のためのいけにえ、平和のためのいけにえ、あるいは感謝のためのいけにえの意味を理解し、楽しむことができるのである。それだから、和解のためのいけにえを含めて、いけにえがささげられる順序は、私たちがキリストを霊的に理解する順序と一致している。

これと同じ完全な順序が穀物のささげ物についても見られる。魂がキリストとの霊的交わりの楽しみを味わい、神の御前で平安と感謝のうちにキリストを糧とするようになると、キリストのご人格の驚くべき神秘さをもっと知りたいという願望が引き出される。この願望は、キリストの完全な人間性の雛型である穀物のささげ物によって答えられている。

さて、全焼のいけにえの中に示されていることは、私たちの理解を超えている。それは神の御目の注視の中で完了されたキリストの御心の不動の献身の表われである十字架上のみわざを示している。これらのことは、各章を学ぶにつれ、私たちの前に、実に美しく、細かに表われてくる。ここで私たちは、いけにえの順序についてだけ考えることにしよう。私たちがその順序を、神の側から

私たちの方へと外に向かってたどろうが、私たちの側から神の方へと内に向かって進もうが、それは実に驚きである。どちらの場合でも、私たちは十字架から始まり十字架に至る。もし全焼のいけにえから出発するならば、その中に私たちは、神のみこころを実行し、神への献身の完全さに従って贖いをするために十字架にかかられたキリストを見ることができる。もし罪過のためのいけにえから始めるならば、私たちは、私たちの罪を負い、また贖いのためにささげられたいけにえの完全さに従って罪を取り除いてくださる十字架上のキリストを見ることができる。おのおのの場合に、そしてすべての場合に、私たちはキリストの神的、そしてほむべきご人格のすばらしさ、美しさ、完全さを見る。確かにこれらのことは、私たちがこれから学ぼうとしているこの美しい雛型についての深い関心を、私たちの心の中に起こすはずである。どうか、このレビ記の著者である聖霊なる神ご自身が、その内容を私たちの心に説き明かしてくださり、それによってこの学びの終わりには、私たちのほむべき主であり、救い主であるイエス・キリストのご人格とみわざについての多くのスリルに富んだ、また魂を感動させる数多くの学びを得たことのために、主の御名を大いにほめたたえさせてくださるように。キリストに栄光が今も後も、永遠にありますように。アーメン。